



低用量ピルで進行抑制

東京都の会社員A子さん(34)は2002年、月経痛で受診した神田第二クリニック(東京・六本木)で、子宮内膜症と診断された。卵巣に出血がたまる「チョコレート」のう胞があり、痛みを和らげ、病気の進行を抑えるため、低用量ピルを用いたホルモン療法を続けていく。

低用量ピルは、卵巣から分泌される2種類の女性ホルモン(卵胞ホルモン、黄体ホルモン)を含む。21日間服用し、7日間休んで、また服用する。薬を休む期間に月経のような出血があるが、排卵はない。

もともと避妊用の薬で、月経痛治療などに用いられる中用量ピルに比べ用量が少ないため、吐き気などの副作用も軽い。

Aさんは「吐き気はありますが、子宮内膜症の痛みは消え、女性ホルモンの

おかげで肌の調子も良くなりました。以前は月経周期の乱れもあったが、出血が規則的になり、旅行などの予定も立てやすくなりました」と、喜ぶ。

従来の注射などのホルモン治療薬は副作用が深刻で、半年間しか使えなかったため、十分に子宮内膜症の進行を抑えるのは難しかった。同クリニック院長の間壁さよ子さんは、「低用

量ピルは安全で、妊娠・出産までの進行予防や、手術後の再発予防に、長期に使える」と話す。

結婚から4年たち、「そろそろ子供をと考えている」A子さん。低用量ピルは服用をやめれば、数週間で月経も再開する。将来出産を予定している女性にも使いやすい。

低用量ピルは従来、避妊用に認可された自費診療の



低用量ピルについて説明する間壁さん(東京・六本木の神田第二クリニック)

日本子宮内膜症協会の電話相談

☎06・6718・4789で水曜の午後2時～5時、木曜の午後7時～9時に受け付ける(休止の場合もあり)。

薬しかなく、子宮内膜症に対しても保険がきかなかつた。08年、子宮内膜症の治療薬として初の低用量ピル「ルナベル」が販売され、保険で使えるようになった。

患者団体「日本子宮内膜症協会」代表の、いぬい益美さんは、「ようやく日本でも、低用量ピルが標準治療薬として当たり前に使えるようになった」と評価。

「世界では、女性ホルモンの量がより少ない超低用量ピルも使われている。日本でも、もっとピルの選択肢を増やしてほしい」と話す。

低用量ピルは、心筋梗塞などの危険性が高い高血圧の持病がある人には使えない。08年には、2種類の女性ホルモンのうち黄体ホルモンだけを含んだ治療薬「ダイナゲスト」も認可された。卵胞ホルモンを含まず、高血圧などのため低用量ピルが使えない人や、低用量ピルでは痛みが十分緩和できない場合に使われる。